

と云つて下さつたのだ。どんなことがあつても癒ると保証もして下さつたのだ。けれど今はまだ病人なのだから無理をしてはいけないよ。』

とこまごまと正彦は説き聞かせました。

『よく解りましたわ。おまへはもう癒つたなどと云はれたいなどと云ふ夢を見て居ましたのも、眞實はそれは絶望からのことなのです。これから癒る見込みが立つたと云ふことを云つて頂いた程嬉しいことはないんですわ。』

と心の底から湧いて來た感情を順子は父に告白しました。

『神経の興奮を避けてね、今夜はもう静かにおやすみ。』

『ええ、按摩の子と一寸だけ話してはいけないうせうか。』

『それ位はいいでせう。』

と母の光子はとりなして居ました。

『私が思ふのに、あの盲目の子は四五年前からあ

あなつたと云ふのだが、その時分に今ほどエツキ
ス光線の療法が進歩して居たなら或ひは助けら
れた目かも知れない。』

正彦はこんなことを云つて居ました。

九時半頃に女中頭はお梶按摩を順子の居間へ
伴れて來ました。

『お嬢様、おかへり遊ばせ。』

『暫くだつたのね。お變りがなくつて。』

『はい。毎度御ひいきになつて居ります。』

『ゆつくりお話しね。』

『お嬢様、申しかねますが、お横におなり遊ばして、
私におみ足でも撫でさせて下さいませんか。か
うして居りましたとお話をいたしますと、顔から汗
ばかりが流れます。』

とお梶は云ひました。順子は哀れに思ひまし
た。順子は若い女中に床を取らせて、その上へ横
はりました。

『おまへは彼方へ行つて居てもいいわ。』

と順子は女中に云ひました。

「はい。」

女中はこの室を出て行きました。

「按摩さん私の病氣のことを何時も案じてくれるのだつてね。」

「はい。」

お梶は暗い處で涙を零して居ました。

「私ね、もうそのうちよくなることが解つて来たの。」

「まあお嬢様。」

お梶は順子を撫でて居た手を思はず自身の膝の上へ持つて、行つて見えぬ目で上をじつと見つめてかう云ひました。

「私ね、病氣が癒つたら澤山いいことをしてよ。」

「はい。」

「いいことばかりするつもりよ。人に品物を上げたりなどして喜ばすこと位ぢやいけないと私は思つて居るの、大きい大きいことを澤山するつ

もりよ。」

「まあ結構で御座いますこと。」

「云つて見ればね、あなたの目を癒して上る位のことをするのよ。」

お梶は低い笑聲を立てました。

「楽しみにしてゐらつしやいな。それが出来なければそれに相当するだけのことをさせて貰つてよ。」

初めは笑つて居ましたお梶も、餘りに順子が熱

心に云ひますので、思はず釣込まれまして、

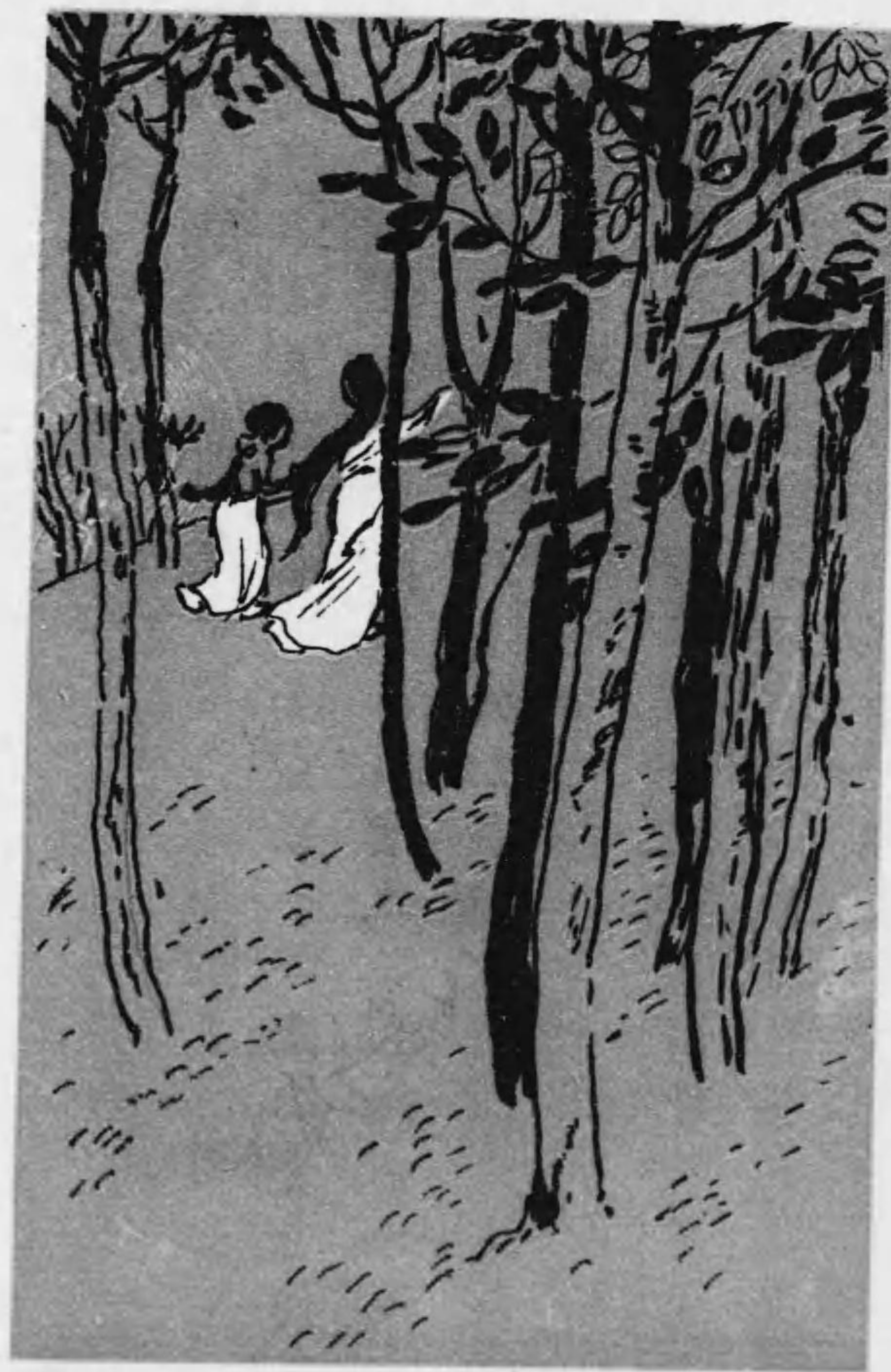
「どんなにその時は嬉しう御座いませう、」

などと云つて居ました。

お梶は菓子や果物の外に、順子が鎌倉から持つて歸つた手觸りの滑らかな貝がらをいくつも貰つて歸りました。順子は由比が濱の浪の音の聞えて來ないのを物足りなく思ひながら眠りに就きました。

翌日の綾子は初夏の美しくしい太陽の光りが身体に射して来ましても、これは頼もしいエツキス光線なんだらうなどと云ふ氣がしないでもありませんでした。

最終の八日目に、綾子は下半身だけを被うて、上は裸體のままて神様に伴れられました。
『今日はおぼつかない姫と云ふ子なのよ。』



夜のつ八

とは途中で神様がお云ひきかせになつたこと
てした。行つた處は深い深い山奥なのでした。お
ほつかない姫の外にはお婆さんが一人居ました。
家は二間よりない小さい家でした。お婆さんはお
ほつかない姫のやうな姿をしないで普通の縞の着
物を着て居ました。灯は點されて居ないのです
が、あかあかと窓から月が射して居ました。荒海
の波の音のやうな響きがしますのは、七八町麓の
方にある瀧の音なのでした。もう春が過ぎて居

る今でも、この山では櫻や藤や桃の花が充満咲いて居ます。それが縁側から月の光りで見渡されるのでした。そのはてに銀の魚の走つて居るやうなのが見えるのは細い溪川なのでした。お婆さんは病牛や病馬を丈夫にするのが名人で、遠くからそのことを聞いて治療を頼みに山を上つて来る人が絶えないのでした。癒して貰つた牛や馬の飼主は米や鹽を禮に置いて行きますので、それだけで二人は食物にことを缺かないのでした。小

い方の室に白いものがころころとして居ますのは病氣をして居る山の兎なのです。さう云ふものは何時の間にかこのお婆さんが自分等のためにはまたない名醫であると言ふことを知つて、少し氣持ちが悪いところと轉げ込んで来るのでした。お婆さんはこんなものの世話もよくしてやりました。狐や狸や猿や熊などの来て居ることもあるのですが、今は兎だけが居るのでした。小屋の方には四五疋の牛と馬が居るのでした。

この家へ時々出入をする百姓などはあの小さい娘は神通力のある娘で、お婆さんはあのお蔭でいろんな術が出来るのだなどと云つてました。あの小娘は牛馬とも外の獣とも樂に話が出来るとも云つて居ました。おぼつかない姫は寝ころんで居ました。

「何を考へてなさるだ。」

「私の親のことよ。」

「はれ、またかね。」

とお婆さんは云ひました。
「ひよつとすると牛か馬の子ぢやないかと思つてね私聞いて見たのよ。小屋へ行つて。」

「あんなに病んで居て解るものかね。」

「解つてよ、お婆さん。」

「あなたの御身分がかい。」

「ぢやあないのよ。病氣をして居ても云ふこと

の筋道が立つて居てよ。」

「何と云ひましただ。」

「私はね兩親がないのだよと云つたの。」

「ふん、ふん。」

「お可哀相だ。私等にでもあるものをつて云つてよ。」

「なる程ね。」

「ないばかりでなしに、兩親があつたのか、初めからなかつたのかも解らないの、知つて居れば教へて頂戴、牛か馬ぢやないかしら、私の兩親はつて云つたの。」

「さうしたら。」

「馬も牛も悲し相に泣いてね、さうぢやありません、さうぢやありませんつて云ふの。」

「なる程。」

「なぜつて云ふと、牛や馬はあなたのやうな綺麗な心を持つて居るものぢやないと云つてよ。」

「それはもつともだねえ。」

とお婆さんは感心したやうに云ひました。

「私はまたつくづく身體を見てね、私のやうな白

い柔い身体は牛や馬は持つて居ないのだから、ひよつとすると兎の中にお父様やお母さんが居るかも知れないと思つてね、そしてまた兎に聞いたの。

『無駄なことをなさるだ。』

『この口を御覽なさい。この耳を御覽なさい。』

この尻尾を御覽なさい。この後脚、前脚を御覽な

さいつて終ひには三疋が踊つてよ。』

『もう病氣が癒つただかね。』

『明日あたり歸りますと云つててよ。』

『さうかね。』

『お婆さん私には眞實にお父さんや母様があつて。』

『どうだかねえ。』

『知つて置いてくれるとよかつたのねえ。』

『知つて置けばよかつただあね。』

『どちらか一人位はあつたかも知れないねえ。』

『どちらか一人位はねえ。』

「ないのかしら。」

「ないかも知れないだね。」

「だつてまたあつたかも知れない。」

「さうさ、さうさ、あつたかも知れたものぢやない。」

「御免なさい。」

と云つて縁側の前へ出て来た人がありました。

おぼつかぬ姫は兎の寝て居る室へ入つてしまひました。

「昨日此處へ繪を描きにおいてになつた先生様

がの、お婆さん。」

と百姓男は話し出しました。

「ああ、知つてるだ、二三年このかた時々見える方
だあ。」

「ふん、ふん、あの方様ね、お婆さんの娘さんをね、一
月の間東京へ伴れて歸つて繪に拵へたいと仰つ
しやるだ。繪の方ではえらい先生ちふことだ。」

「知つてるだ。」

「娘さんを貸して上げないかい、一月だけ。」

「さあ、おぼつかな姫に聞きますだ。」

とお婆さんは思案聲で云つて居ました。

「聞えてよ。」

とおぼつかな姫は云ひました。

「どうなさるだ。東京へ行くかね。」

「行つて見ようかしら。」

「繪にかかれるちふことだ。」

繪にかかれて人の目に自身の顔が觸れること

になつたら、親である人が解るかも知れないと、こ

んなことをおぼつかな姫は考へたのでした。是非行つて見ようとも思ひました。

「私行つてよ。」

「ああ云ひますだ。」

とお婆さんは百姓に云つて居ました。

「今夜から行かつしやるかねえ。」

と百姓は満足さうに云ひました。

「明日私が先生様の處へ送つて行きますべえ。」

とお婆さんは云ひました。

『ああ、それがいいだ。』
百姓は歸つて行きました。おぼつかな姫は何
時の間にか兎と一緒に寝入つてしまひました。
綾子が神様からまた母様へ返されました。四五
日して後に、綾子の父の太田畫伯は旅行をして居
た上州の山から歸京しました。
モデルにするのだと云つて父が伴れて歸りま
した光るやうな美しい山の娘を見て綾子は喜
びました。

綾子がこの山の娘に親切を盡したと、山の娘
に山の獸や鳥の面白い話を聞いたことなどは皆
さんの想像に任せませう。

八つの夜をはり

大正三年六月二十五日印刷
大正三年六月三十日發行

受子殿書部四編八つの夜
定價四十錢

製權許不

著者	與謝野晶子
發行者	增田義一 東京市京橋區南紺屋町十二番地
印刷者	石川金太郎 東京市京橋區西紺屋町廿七番地

所行發

社本日之業實

東京市京橋區南紺屋町二十番地
電話京橋四七八、五七八、六七八、九八九
振替口座東京二六

印刷所 株式會社 秀英舍

日本少年局編輯編	少年年文庫				
	刊	編四第	編三第	編二第	編一第
東草水著 渡邊白水著	加藤草影作 松山思水作	九十郎作 九郎畫	有本芳水著	英雄の最期 九版	赤い地圖 十版
名士の少年 時代より 崇拝せる英雄 (新版)	少年春雄 四版	海國男子 四版	少年活動寫眞 五版	定價各廿錢 郵稅各四錢	定價各廿錢 郵稅各四錢
定價四十五錢 郵稅六錢	定價四十五錢 郵稅六錢	四冊郵稅共七十 六錢に割引きの 法あり。			熱烈火の如き英雄を敘するに 胸爛花の如き彩筆を以てす。 悲絶壯絶眞に小説以上の小説。
大隈伯其他の二十七名士が、 各自少年時代より如何なる感 化を得たるか乞ふ一讀せよ。	十五歳の少年春雄を主人公と して、記者十五名が思ひ／＼ に一篇づゝを作れる小説集は これ!	環海國の日本では海外發展思 想を養ふのが急である。即本 書は我國代表的海外の發展者 の活躍である。	滑稽縱横は九郎齋伯の才筆、 洒脱輕快は十郎先生の奇文、 眞にこれ抱腹絶倒の快著!!	赤い地圖!! 血染の地圖!! 一少 年が叔父に對する熱情と、國 家に對する忠誠の如何に美く く悲しきかを見よ。	

長谷部湘雨作	福田琴月君作	愛子叢書			
		編四第	編三第	編二第	編一第
與謝野 晶子作 佐々木林風畫	德田秋聲作 竹久夢二畫	田山花袋作 川端龍子畫	島崎藤村作 名取春仙畫	眼 鏡 四版	小さな鳩 再版
燕ゆく島 新刊	偉人の少年時代 版五	八つの夜 新刊	めぐりあひ 新刊	各冊定價十四錢郵稅六錢	
定價五十錢 郵稅六錢	定價六十五錢 郵稅八錢	少年少女の讀物に注意して居る本社が、現 代文壇第一流の大家に頼つて書いて貰つた 愛子叢書は、大好評の中に第四編まで發行 しました。親が最愛の我が子に讀ませる最 良の物語は實にこの叢書より外にありませ ぬ。第五編以下も續々出版いたします。			
北の國の物持の一人子に生れ た、みどり子は燕ゆく南の國 か戀しいかつたので遂に悪者 にそゝられてさすらい行く旅 の空の憂き物語りです	梅檀は二葉より芳しといふ。 又曰く、王侯將相豈種あらん やと、乞ふ本書を一讀せよ。				

少女の友記者 岩下小葉作	少女の友記者 渡邊白水著	少女の友主幹 星野水裏作	東草水作	
少女小説 涙の物語 十版	少女美談 三版	口語詩 濱千鳥 改訂七版	傳次の夏休み 三版	青い鳥 六版
定價卅五錢 郵税四錢	定價六十錢 郵税八錢	定價廿五錢 郵税四錢	定價四十錢 郵税四錢	定價卅錢 郵税四錢
懐しき父母に別れて思はぬ旅に出でし少女君子が可憐なる物語。全篇涙に始終す。	義に勇む少女の赤き心の花を咲き出でたる美しくも勇ましき物語、絶好の少女讀本!!。	淡路島通ふ千鳥の鳴く聲に似たるやさしき新しき詩、讀んで面白く歌うて更に面白し。	讀み去り讀み來つて輕快流水の如し、文妙にして想奇、一讀頭を解き、再讀お臍の宿をかへる。	愛らしき兄妹が、亡き吾が戀しき祖父母をたづね行く可憐な小説です。

須飯藤塚寒泉著	少女文庫				
	刊	增	編四第	編三第	編二第
十五記者作合	加藤草影	渡邊白水	富岡鼓川	星野水裏	東草水
家庭動物園	美代子	世界少女くらべ	灯ともし頃	小僧泣草	少女桃割れ
再版	三版	再版	再版	三版	四版
定價四十錢 郵税六錢	定價四十五錢 郵税六錢	各冊二十錢 郵税四錢		一年分四冊前金で直接注文の方に限り郵税共七十六錢に割引す。	
舟でも囁み碎く河馬、藤をする蚤、動物界の美術家、鳥の編物師と裁縫師、數十の話はお伽よりも面白い。	十五歳の少女美代子を主人公として記者十五名が思ひ／＼に一篇つづを作つた小説集です。	花の如き乙女が身を挺して働いた實話を集めたるのであります。	冷落した兩親は三つの芳子を入に託してから十年目に再び歸へた時の芳子の情緒は如何。	悲しい事を悲しいとも思はず、嬉しい事を嬉しいとも思はぬ少女お富の物語、天下無類の小説!	不運なる少女千代子が、十七年の思出を記せる涙の自敘傳、草木先生の筆に修飾せられて出づ。

三津木春影作	長谷部湘雨作	米光關月作	高等師範教授 文學士 高木敏雄著
孤島の姉妹 三版	露子姫 七版	秋子の命 四版	大正新イソップ 三版
定價卅五錢 郵税六錢	定價卅錢 郵税四錢	定價廿五錢 郵税四錢	定價八十錢 郵税八錢
蠻煙けぶる南洋の孤島に雄々しき日本の少女！さても越し方行末やいかに？	十六歳の少年巧に世界各國の皇帝に謁したる事實談、奇智妙策、眞に天來の快舉。	悲惨なる家庭の犠牲となりたる姫の運命物語。泣かぬは木か石か？	捨てられし子、捨てし親、情は通ふ胸と胸、捨てられし秋子、捨てし父の運命はいかに大正新時代の新しいイソップ物語である。新時代家庭必備の物語です。

瀧澤素水著	著水素澤瀧 年少本日前		
	冒險小説	怪奇小説	少年少女小説
秘譯 暗中の怪人 再版	生か死か 九版	難船崎の怪 九版	少年少女小説 花 八版
定價四十五錢 郵税六錢	各冊 定價卅五錢 郵税四錢		
素水先生筆を斷つ一年にして默想遂に案を叩て筆を架す、ここに本書をなす。四方の諸君は速に讀め。	尙交會掉尾の巻「生か死か」は素水君畢生の心血を凝いて、妙想を凝らし鬼筆を走せたるもの。	理學博士が海賊の巨魁、海底に家を建て、可驚發明を應用して船艙を脅掠す、一讀膽を寒らす。	惡漢の爲に怪洞裡に捕はれた一少女を救はんとする一少年の苦心焦慮を描く、奇策縦横眞にこれ奇蹟！

實業之日發行 物行刊期定大六

■實業之日本

▲一冊十一錢郵稅一錢五厘▲每二回(一月、十五日)發行
▲二年分增刊▲半年分增刊郵稅共一圓六十錢(新年號を合
む分は十錢増)▲一年分參圓二十錢

■婦人世界

▲一冊十五錢郵稅一錢五厘▲每月一回一日發行春秋二回
增刊▲半年分郵稅共一圓五錢▲一年分同二圓五錢

■日本少年

▲一冊十錢郵稅一錢▲每月一回一日發行春秋二回增刊
▲半年分增刊郵稅共七十錢▲一年分同二圓卅九錢

■少女の友

▲一冊十錢郵稅一錢▲每月一回一日發行春秋二回增刊
▲半年分增刊郵稅共七十錢▲一年分同二圓卅五錢

■幼年の友

▲一冊十錢郵稅五厘▲每月一回一日發行
▲六冊郵稅共五十八錢▲十二冊同一圓十錢

■實業講習錄

▲每月二回發行每號二百餘頁▲一ヶ月(二冊)五十錢▲三
ヶ月(六冊)一圓四十五錢▲六ヶ月(十二冊)二圓八十錢
▲一ヶ年(二十四冊)五圓五十錢

340

21

終

